

# 秘密の部屋

玉井江吏香

高梨君春 50才前後男

高梨星子 50才前後女

高梨ありす 26才、君春と星子の娘、もうすぐ結婚する

うす暗い、古い蔵の二階。窓から床に窓の形に光が差し込んでいて。窓際に大きなま新しい机とアンティーク調の椅子が置かれてあり、男が腰かけてぼんやりしている。床には掃除道具や大工道具が散らばっている。ぎしぎしと音がして、女（ありす）が入ってくる。

ありす ぜんぜん今からでしょー。

君春、足元の乱雑に置かれた掃除用具、大工用具などまとめながら、

君春 お母さんは？

ありす おばあちゃん、また眠っちゃったみたいで、様子見てるって。起きたら教えてくれるって。

君春 そうか。洋平くんは？

ありす 午前中仕事して半休。夕方着くって。

ありす お父さん、  
君春 ああ、お前か。  
ありす なにしてんの？・・・ここは明るいね。階段足元暗くてこ  
つわ。

ありす、室内をしげしげと見まわしている。見まわしながら、

君春 ……休憩。だいぶ、きれいになったよ。

ありす ふうん・・・なに、今から隠居部屋つくってんの？

ありす 蔵・・・初めて入った。二階、こんななんだね・・・  
君春 そうだな・・・ずっと、おばあちゃんが立ち入り禁止にして

君春 おお、愛娘も結婚するしな・・・あとはその壁とその壁に  
本棚作ったら完璧だ。

ありす ……お父さんがきれいにしたの？  
君春 ちよこちよこ来てな。お父さん、こういうの（工具を指し）

ありす （笑いながら）なるほど、ここでまた作家「たかなしきみ  
はる」の新しい作品が、

得意なんだよ実は。棚作ったりな。

君春 おいまだ働かせる気か。

ありす へええ。

君春 ま、お前、そもそもあんまりおばあちゃんち来たがらなかつたし。

ありす うん・・・だっておばあちゃんち来ると、お父さんとお母さん決まって喧嘩するんだもん、そりや来たくないよ、子供はそういうの、敏感なんです。

君春 そうか。

ありす そうです。

君春 な、おばあちゃんち、

ありす ん？

君春 お前の結婚式までは、

ありす うん・・・

君春 もたんかもしれないなあ。

ありす うん・・・結婚の挨拶と、報告だけでも、ね。

君春 そうだな。

少し間

ありす けどちっちゃい頃はよく来てた気がする・・・お葬式とか

法事とか、なんかほらそういうので。

君春 田舎だから・・・お母さん、あれで総領娘だからな、いろ

いろあるんだよ、村内の付き合いが。

ありす 退屈でうろろうろしてたらよく怒られた。蔵に近づくなんて。

ねえここって、

君春 お前がやるんだぞ、ご近所回りとか商工会の付き合いとか、

いずれこの家を継いだら。

ありす うん。まあ、そうだけど、ねえ、

君春 苗字も、高梨ばかりだろ。

ありす あ、うん。くみこおばさんは「下高梨」で、昔「門店（か

どみせ）」だったところは「中高梨マート」。

君春 この家が本家「高梨」で、おばあちゃんがまあ、あれだな、

岩下志麻的な、

ありす なにそれ。ねえ、ここって、

君春 犬神松子かな。

ありす ここってお父さんの小説の・・・「秘密の部屋」の、なんて

いうかええと、舞台っていうか元ネタっていうか、

君春 ああ・・・よく分かるな。

ありす そりや、「秘密の部屋」はお父さんの代表作だし。

君春 昔のな。

ありす ・・・・うん、まあ。

君春 処女作にして最高傑作。一本だけの、代表作。

あります んーと・・・今のライトベースなエッセイも好きだよ、私  
は。だってほらそのおかげで育ったようなもんだし。でもほらあれ  
はさ、

君春 ……

あります 特別っていうか、

君春 ……

あります 特別。

君春 そうだな。

あります そっか・・・何となくそんな気はしてたんだ。

君春 ……

あります 本当に・・・ここに居て、ここで亡くなったんだね。

君春 ……

あります お母さんのお姉さん、月子さん？

君春 ……

あります モデルなんですよ。「秘密の部屋」の主人公の・・・その・・・

恋慕の、対象。

君春 ……そうだな。

あります 素敵やんめっちゃ。

君春 (苦笑) 素敵か、

あります 嫁に行く娘に教えてよ、父の秘密。

君春 嫁に行く娘に話すことじゃない。

あります へええー。

君春 昔の話だよ、全部。

あります ならいいじゃん。

君春 お母さんに聞け。

あります やだ絶対。機嫌悪くなるもん。

君春 ……

あります ねえお願い。

君春、少し思案、娘を見て、部屋を見まわして、

君春 火事の話は？

あります なんとなく、知ってる。でも誰も教えてくれないから、聞

いちゃいけないのかなって。

君春 ぼやがあって。月子さん、死んだんだ。入り口に、外側から

鍵がかかって。

あります うん。

君春 誰かがうっかりかけたんだろう、って話になった・・・なあ

ほんとに聞きたいか？この話。

あります 聞きたいよ。私、この家を継ぐんだよ、洋平さんと。

二人、少しの間黙る。

君春 お父さん、養子でな。本家裏の下高梨の家にもらわれたんだ、

跡取りが居なかったんだ。月子さんは、この、高梨の家の総領  
娘でね、お父さんやお母さんとはちょうど十歳離れてた・・・きれ

いな人だったよ、ただ身体が弱くてあまり外へは出られなかった。

蔵の中に部屋を作って、大抵はここで過ごしてた。母屋（おもや）  
にずっと居るのも気づまりだったんだろね。

ありす おばあちゃんはあんな人だし？

君春 （少し笑う）そうだな・・・そこも、そっちの壁にも・・・

本がたくさんあつて。

ありす まんま「秘密の部屋」だね。

君春 お父さんは、知識に飢えてた。本が読みたくて、ここに通つ  
た。そのうち、俺は小説みたいなものを書くようになって。月子さ

んは、いい読み手だったよ。中学生の俺の書くものを、とても・・・

とても面白がってくれた。

ありす うん・・・ね、

君春 なんだ？

ありす 二人で、蔵に籠ってて・・・変な噂になったりしなかった

の？

君春 なつてたかもなあ・・・当人が知らなかっただけで。田舎町  
だからなあ。

ありす へええ。

日が、少し陰る。

君春 中2の、夏休みの三日目だ。植物園の水やり当番で、少し遅

くなったんだここに来るのが。そしたら蔵の前に人だかりが出来て  
て、警察や消防車が来てて、お母さんが、泣きながらお父さんにか

け寄ってきて、

星子 ありす？お父さん？何してるの、こんなところで。

ありす お母さん、

いつの間にか星子が入り口に立っている。室内の様子を見て、

星子 遊びに来たんじゃないのよ。洋平さん、そろそろ着くんじや

ないの？

ありす え、もうそんな？（携帯で時間を見る）、わ、ほんとだ駅着

いたってライン来てる。

君春 迎えに行かなくていいのか。

ありす 大丈夫大丈夫、何度も来てるからひとりでも来れるって。あ、おばあちゃん、

星子 起きたわ。またすぐうとうとするとと思うから、挨拶するなら今行つてきなさい。

ありす はい。じゃあ、

星子 あ、悪いんだけど、母屋のお台所に重湯つくってあるから、持つて行つてくれる？ たぶん、食べないとは思うけど、なんならこ  
う（指で唇をなぞつて）スプーンで唇に這わすだけでもいいから。

ありす わかった、（君春を見て）あ、じゃあ、

君春、手で、早く行け、と合図。

ありす、ばたばたと。

ありす お父さんごめんまたあとで、

君春 足元気をつけろよ。

星子 早く行きなさい。

ありす、退場。

星子、机と椅子の置かれた室内を見る。近づいては来ない。

しばらく無言。

星子 いつこんな。

君春 ……お前がお義母さんの看病に来てる間、少しずつ。

星子 パチンコにでも行つてるのかと思つてたわ。

君春 やつとだ。

星子 鍵は？

君春 母屋の、奥の間の仏壇にあつたよ。

星子 そう。

君春 火事のあと閉め切つて、そのままだったから、埃なんか煤  
なんかか積もりまくつてたけどな、なんとか。

星子 ……

君春 （机を触つて）ホームセンターでよく似たのを探したんだ。

本当はこんな安っぽくなくて、もっと、重厚な感じだったけど、と  
りあえずまあこれで。この椅子、ネットのアンティーク屋で見つけ  
たんだ、そっくりだろ、特にこのひじ掛けのあたりの丸いところ。

（室内を歩きながら）ここからここまで、あと向こうの壁も本棚で。

この位置に、古いソファがあつて。

星子 緑色の。

君春 ……深緑の。

日が少し陰って、室内暗くなる。

君春 電気を引かないとな・・・婆さんが死んで、ありすが高梨を  
継いで、洋平君と二人でこの家を回すようになったら、俺はここを  
もらって、隠居部屋にするよ。

星子 ……もうすぐ商工会の村松事務長さんが来ますって。

君春 お義母さんの役を引き継ぎつつ話だろ。

星子 ええ。高梨がずっとやってきたことなので。

君春 いいよ、どうせ名前だけだ。差配はお前がするんだろ。

星子 それと、お母さんのお葬式、喪主の挨拶お願いしますね。

君春 それは・・・君か、ありすの方がよくないか。

星子 こういふときは、男衆でないと。挨拶文、考えてくださいね。

君春 ああ。今まで通りだ。

星子 ええ。

ふたり、離れて向き合う。どちらも視線を外さない。少し間。

また少し日が陰り、二人の顔が見えない。

星子 じゃ、私、母屋の様子、見てきますから。

君春 ああ。

星子 あなたも、お夕飯までには降りてきてくださいね。洋平さん  
もいらつしやるから、今日はお寿司でも取りましようか。

君春 そうだな、ああそーいやビールが、

星子 さつき山本酒店に頼んでおきましたよ。

星子、踵を返して部屋を出ようとする。その背中へ、

君春 星子。

星子 ……

君春 お前さ、あの時、

星子 ……

君春 火事の日、帰ってきた俺に「どうして」って言ったよな。泣  
いてすがりついて「よかった。どうして、」って。

星子 ……

君春 遅くなったんだ、あの日に限って。いつもなら、俺はここに、

月子さんと一緒に居た。

星子 ……

君春 火が回った時、鍵は外側からかかった。お前、

星子 私じゃありませんよ。

君春 . . .

星子 火をつけたのは。

君春 . . .

星子 私、あなたと同じで、月子姉さんが大好きでしたから。

一瞬間

君春 じゃあ鍵は、

星子 ビール、

君春 . . .

星子 瓶にしまったから。

星子、君春を残し、退場。

君春だけがいつまでも部屋にいる。

だんだん日が陰る。

暗くなる。

おしまい